

今村冬三

幻影解 「大東亜戦争」

戦争に向き合わされた詩人たち

幻影解

「大東亜戦争」

戦争に向き合わされた詩人たち

今村冬三

葦書房

■著作者 今村冬三

1928年，熊本県に生まれる

1943年まで奉天市（現在の瀋陽市）に在留

詩誌「子午線」同人

著書：詩集『鈍行』（1977年）

詩集『ヘルスメーターの上のものの思い』

（1987年）

現住所：長崎市本尾町313（〒852）

幻影解「大東亜戦争」

戦争に向き合わされた詩人たち

一九八九年八月十五日 初版第一刷発行
一九八九年十二月五日 初版第二刷発行

著者 今村冬三

発行人 久本三多

発行所 葦書房有限公司

福岡市中央区赤坂三丁目一番二号

電話 ○九二（七六一）二八九五

振替福岡一 三九四三〇

印刷 製本 凸版印刷株式会社

価格はカバーに表示しております。

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

0091—8931—0135

目次

はじめに・凡例をかねて	5
-------------	---

I

一 疑問という形の序論	9
二 戦争詩・愛国詩・国民詩	28
三 詩人たちの戦争観	57
四 〈戦争詩〉における表現の問題	87
五 兵士という「他人」の死	109
六 戦中への戦後の眼差し	144
七 幻影解「大東亜戦争」	163
八 〈戦争詩〉の座標	193

II

一 高村光太郎の場合	209
------------	-----

その一	黄いろいという意識の行方	209
その二	不連続と不成熟ということ	234
二	三好達治の場合	253
三	兵士たちの戦争詩	272
四	私を立ち止まらせた詩	293
五	愛国詩の時代	318

III

断藁一束	333	
その一	詩人の豹変について	333
その二	詩人の自己批判について	337
その三	小林秀雄の「覚悟」について	340
その四	様々な愛国心	350
その五	詩集の日付について	353

その六 「戦争」との再会	356
あながき	366
起句による引用詩索引	371
初出誌一覧	383

はじめに — 凡例をかねて

本書は、時期的には一九三七年から一九四五年にいたる約八年間に現れた、戦争・時局をモチーフとする詩作品及び詩人の言動を主たる考察の対象として論考を試みたものである。

引用の資料には当然のことながら、当時用いられた様々な呼称がそのまま出てくるが、それらの中には戦後与えられた呼称と大きく異なるものがある。読者にとつてなじみのあるのは後者であるにちがいないが、本書では敢えて当時の呼称を用いることとした。その理由については本文中に明らかにしている。ここでは触れない。ただそうした呼称を用いたからといってそれを好ましいと考えて居るわけではないことを申し添えて、あらかじめ了解を得ておきたい。

その主なものは次の通りである。

大東亜戦争……今日、一般に「太平洋戦争」と呼ばれている、一九四一年十二月から一九四五年八月に至る戦争を指す。

支那事変……今日、一般に「日中戦争」と呼ばれている、一九三七年七月から一九四一年に至る戦争を指す。これは当初「北支事変」と呼ばれていたが、戦線の拡大に伴つて、「支那事変」或いは「日支事変」と変わつていった。「支那」という呼

称には中国蔑視の意があり、だからこそ當時はこのように呼んだのである。

戦争詩……………主として支那事変の間に現れた戦争をモチーフとした詩作品を指す。

愛国詩……………主として大東亜戦争の間に現れた戦争をモチーフとした詩作品を指す。

戦後は両者を区別することなく戦争詩と呼ぶケースが多いが、この場合は〈戦争詩〉という形で示すことにした。

なお次のことをお断りしておきたい。

一つは全文の引用と部分的引用とがあるが、そのことをいちいち示すことはかえって煩わしいだけではないかと考えたので、全文引用の場合のみ、作品名の下に*印を付して区別した。

二つには当時の詩語は殊更に難語に執したきらいがある（それがひとつの特徴でもあった）が、引用に当たっては、著者の判断で適宜ルビを振り、略字を用いて、読解が容易になるよう配慮した。

三つには作品等の発表された時期及び発表詩誌名等（これらは私が調べた資料のそれであり、必ずしも最初に発表されたということではないので為念）についても煩雑さを避け、巻末に索引の形で一括して示すことにした。

なお文中における敬称は省略させていただいた。

I

一 疑問という形の序論

はじめに

大東亜戦争は、一九四一年（昭和十六年）十二月八日に始まった。多くの詩人たちが憑かれたもののよう^にに戦争支持、戦争讚美の詩を無数に作り出していった。愛国詩集、戦争詩集といった体の詩華集も数多く刊行された。

いきなり、否応なしに「戦争に向き合わされた」詩人たちが昨日までの詩論も詩法も自己放棄して「大君の任^まけのまにまに」「まつろはぬもの」「撃ちてしまむ」のシュプレヒコールを行なった、その姿は「慘澹たる」という以外に形容の仕様のないものであった。

この事実に対して敗戦直後の「文学検察」以来近くは桜本富雄の「空席通信」に至るまで数多くの批判が行われてきたが、そこでの「戦争と詩人の問題」は主として「詩人の戦争責任——そ

れを逆照射する意味での戦後責任」を問うという視点から捉えられてきた、といつてよいと思う。しかし批判の対象に挙げられた詩人たちはこれに反論することなく口を閉ざしたままである。そのような状態で既に四十数年が過ぎ、ほとんどの詩人は既にこの世にない。

それでは問題は決着を見たのか、というとは決してそうではない。批判の厳しさにもかかわらず事が意外に静かに推移したのは、それらの批判は常に少数者からのものであり、これに対して詩人たちは「言わぬが花」という低次元かつ最も非生産的な態度で臨んだからにほかならない。

このため大東亜戦争中の、詩に投じられた膨大なエネルギーは読者によってばかりではなく、作者である詩人自身によつてさえ嫡子（詩）たることを否認されて、ついに継承さるべき私たちの精神的遺産となり得ていない。果たしてそれでよいのだろうか。

なるほど当時の戦争讃美の詩は、それを書いた詩人にとっては、今は恥ずべき以外の何ものでもないかも知れぬ。たとえば高橋新吉はその全集を出すにあたって、大東亜戦争下の詩集『霧島』（二九四二年）、『大和島根』（二九四三年）の作品群からそれぞれ十一篇、八篇を削除し、その理由を次のように語ったという。

詩としてよくないのです。当時の誤った思想で書いている。戦争謳歌だけで情念がない。最低の詩ですよ。

（毎日新聞八二・八・二一、池田一之「詩人と戦争」より）

また伊東静雄は桑原武夫によれば、一九五三年、創元社版「伊東静雄詩集」の刊行を、戦争詩を必ず除くという条件で承諾したという。このように戦後、自らの詩集を編むに際して戦争下の作品を洩らさず収録した詩人はほとんどいない。詩人たちは自らの作品を自ら葬り去ったのである。

恥の部分を隠したがるのは詩人に限らず誰にでも共通する心情である。だがそれは「誤りでした」といえばそれで済む程度の問題だったのだろうか。それで済むならば詩人ほど気楽な商売はないだろう。いやそういうことはどうでもいい。軽蔑の一語を投げ付ければ済むことだ。

ただ私はこう考えている。思想は連続していなければならぬ、微分可能でなければならぬ、思想とは本来がそういうものなのだ。もしそれが不連続であるならば、それは何故に生じたかが明らかにされねばならない、と。

そしてそれはあくまでも詩人ひとりひとりが答えを出すべき問題である、と。

もしそのような思想的営為がなされていたならば、たとえばいかなる詩が戦争下で書かれていたとしても、それはそれなりで貴重な精神的遺産——少なくとも遺産形成に必要な礎材——になり得ていたはずである。しかし残念ながら事実はそのように進まなかった。

詩人にそのような意識はついに生まれなかったのか、それとも糾弾があまりに厳しかったのか。恐らく両者の相乗作用であろうが、もちろん重要なのは前者である。この自己寛容性は思想的怠惰以外の何ものでもなく、それを私は日本現代詩の根本的欠損部分と考えないわけにはいかない。

のである。

今日、この問題を最も執拗に追究しているのは桜本富雄だろう。彼の方法については疑問もある。しかし、それを時代錯誤の言動程度にしか考えず、無視できない問題提起として虚心に受け止めようとする詩壇の感覚はそれ以上に問題であろう。

私が「戦争に向き合わされた詩人」の問題に関心を抱くのは以上のような次第からだが、だからといって私は今更のように「詩人の戦争責任論」を展開しようなどと考えているわけではない。というよりもそうした方向からの追及によって果たして何が析出されるか、という強い疑問が私にはある。「一億総懺悔」の図式があるかぎり、戦争責任の追及は戦争責任回避の口実を与えるだけのことに終りはしないか。また当時の言論弾圧体制の下にあって抵抗の組織も基盤もたぬ詩人たちに何ができたか、ということも考えなければならぬだろう。

私は戦中における言論弾圧の凶暴な実態については直接には何も知らない。しかしそれがいかなるものであったかは、たとえば元中央公論編集長・畑中繁雄『覚書昭和出版弾圧小史』のごとき一冊によっても十分に窺い知ることができる。問題の本質に敢えて立ち入ろうとはしない詩壇のゲマインシャフト的な体質を是とするものでは決してないが、あの弾圧の厳しさを考えるとき、当時の詩や詩人の状態を現在の論理や常識だけで云々することが妥当だとは思えないのである。弾圧が合法化されてから後の抵抗にはおのずから限界があるのは当然である。真の抵抗は存在しなかったといってよいだろう。

敢えて責任を問うとすればそれは〈戦争責任〉でも〈戦後責任〉でもなく、危機の破局的進行を解説することができなかったばかりか、解説しようとさえせずついにみずからをそこに追い込んだ〈戦前責任〉こそが問われなければならないのではないか。

以上を要するに私が関心を持ち、明らかにしたいと考えているのは、詩人という種族の意識構造であり詩人という素材を通してみた日本人の意識構造である。〈詩の近代〉とは何か。〈詩の近代〉は何故かくも脆かったのか、ということである。

大東亜戦争は狂気としかいいようのない一面があるが、詩人たちが譫妄状態に陥りながらその中にのめりこんでいったのは何故か。ブレーキはかからなかったのか。それともかけようとはしなかったのか。

戦争は二度とあつてはならない、と誰もがいう。そのことに誰もが異存はないだろう。

だが大東亜戦争における詩人の惨落は、果たして一過性の現象に過ぎなかったのか。再発の虞れはないか。不戦の決意は詩人の体質に根付いた、と言い得るか。

非詩的なあまりに非詩的な問いといわれるかもしれないが、それに対しては「詩的とは何か」という問いで答えるほかはない。率直に言つて、大東亜戦争下の詩や詩人の言動ほど「非詩的」なものはない、といつても言い過ぎではないからである。

私は私の関心する幾つかの疑問から入つていこうと思う。それを辿つて行くことが私に何を明かしてくれるのか、私をどこに連れて行くのか、私は知らない。そのほとんどは既に先人の解明

した跡を追うにすぎないだろう。しかし私は何か新しい知見を示そうと考えているわけではない。ただ自ら追究してみることによって、私自身の未必の責任を明らかにしておきたいと考えているにすぎない。

〈大東亜戦争〉という呼称について

家永三郎氏はその著『太平洋戦争』において、「(林房雄の『大東亜戦争肯定論』が公刊され)ここに戦争中の『大東亜戦争』の名称は、その積極的支持の評価とともに、ふたたび戦後の日本に復活したのである。……このような戦争中の亡霊が白昼公然と一九六〇年の日本の読書界に横行し始めたこと」は無視できないとして「『大東亜戦争』の名の使用は断じて不可」との信念を吐露されている。

一般に「太平洋戦争」とよばれているものを本書では「大東亜戦争」と呼ぶことにする。それはしかし林房雄らと同じ意味で用いるのではない。その逆である。家永氏の言を借りれば、私は「積極的否定」の立場からこの言葉を用いたいと考えているのである。氏と同じく「この戦争を何と呼ぶかは、戦争の歴史的意義の理解のし方と結びついているばかりでなく、戦争名の変遷自体に思想的な意味が含まれている」と考えるからである。いやもっと露骨に言えば〈大東亜戦争〉という呼称に自己正当化の意図を感じるからであり、それは詩人たちの一九四一年十二月八日を境にしての、なだれ現象と密接に結び付いていると考えるからである。